掲載許可番号：d20250521-05

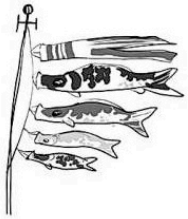


私が宇和島市三間町の毛利家で感じた「人間の生活と、自然の領域の接点が近い」という印象を分かりやすく説明すると、人間が畳を敷いた空間で寝起きし生活を営む住空間と、裏山から始まる自然が、現代の生活に慣れた私にとって意外なほどの近さで隣り合っていたということになります。民俗学では日本人が「山」を神聖視してきたという論考があります。古来、人は亡くなると魂が「山」へ行くと信じられてきたというもので、柳田国男は著作でこうした論を展開しました。つまり「山」とは人間にとって「異界」なのです。毛利家では生活の場と、この異界とが障子一枚を隔ててあっけないほどに隣接しているという印象を持ちました。

そこで「異界から、何かが訪れた」という状況を私は思い描きました。前に触れましたが、私の作品は現実にいる人間や動物の形を具体的に表したものではなく、私の内的なイメージの形を3次元化したものです。いわば、異界からやってきた形の作品だと言っても差し支えありません。すべてが新作というわけにはいきませんでしたが、毛利家での初めての個展で、過去の作品も含めこの場所の雰囲気に合うと感じる「異界からの作品」を運び込み展示しました。

## 毛利家での展示(3)

私はいつも展覧会で作品を並べて飾り付け、展示を完成させていったん客観視します。そして時間が経過していくと、次第に自分の作品の未消化な部分が見えてきてしまい、いたたまれなくなることがあります。ひどいときは、展示が完成したとたんにつらくなり、すぐに展示を畳んで帰りたい衝動に駆られることもありますが、毛利家では、そのようなことはありませんでした。搬入前に思い描いていたように、作品と場所の雰囲気に違和感はありませんでした。



ただ、建物の古さや存在感をはじめ全ての点で毛利家は私の作品を格段に超えており「時間が堆積して深みがある場所に、何か面白いものが来た」といった見え方になりました。こうした新しい見え方で作品を眺めることが自身の成長にもなりますので、展覧会で発表するときの一番の収穫だと考えます。

SNS(交流サイト)等の情報発信サイトが発達する現在、私はこのようにアナログな手法ですが「この場所に来て、触って、香りを嗅ぎ、実在を確かめ、初めて見たと言える作品」を発表する意味を実感しています。これは幼児教育の美術でも大切にしている「直接経験」を伴う鑑賞に当たるといえるでしょう。

展覧会には作品を本当に観(み)たい多くの人が来てくださるのが理想ですが、日がな一日待ってもほとんど誰も来ないこともあります。制作者としてはその孤独や寂しさに耐えるのも、次の展開につながる経験だと考え、一人で作品と向き合います。

(増本　達彦・松山東雲女子大教授・彫刻家〈Ｄｒｉｌｌ―ｍａｓｕｍｏｔｏ〉)